



大口を開けて笑っている「ばっちゃん」、ダイコンを両手に抱えた前掛け、長靴姿の「ばっちゃん」。農作業の中の一コマや笑顔、表情が生き生きと語りかけてくる「宮竹ワールド」。見るほどに、封じ込められた幸せな時間が息づいています。一体の主人公が語りかけてくるのは生きること、それとも豊かな食への感謝と礼賛(?)。あるいは駆け抜けていった戦後・昭和の時代の幸せな記憶の断片でしょうか。仕舞いこんだ大切な郷愁が揺り起こされるように、眠っていた心の琴線に語りかけてくる懐かしさ。それは田園に暮らす女性がつむぎ出した生への賛歌。



「よっこらしょ!」。「ばっちゃん」が円柱のレンガの筒に半身で腰掛けています。鍬を立て掛け、傍らにはおばあちゃん手作りの風呂敷包みの弁当が。「さて、さて、もうひと働きするかい」。それとも「今年の稲は良い出来秋じゃあ」と満足げに一人こと(?)。

昨年(第81回)道展一般入賞作品「秋・爺」(工芸部門、30<sup>センチ</sup>×24<sup>センチ</sup>×32<sup>センチ</sup>)。

水彩タッチの淡い色使いのじいさまが今にも身を乗り出してきそうです。

「ばっちゃん」が麦わら帽子をお腹に抱えて大口を開けて笑っている作品も。野良作業の帰り道でしょうか。人々が、やさしい幸せな時間に包みこまれているような。

緋(かすり)の着物にもんぺ姿の農家の女たち、手に鍬を持った男たち。人々の笑顔や農作業の情景。その一コマ、ひとコマには、いつも太陽が燦々(さんさん)と照り注いでいます。

平成3年、夫博信さん(58)の脱サラで、一家で茅ヶ崎市から引越してきた年のこと。

「一番下の子が小学校に入学した

時にね、生徒7人が先生の後をチョコチョコとついて歩くんです。とにかくかわいかった。「ここは良いなあ」と思ってた。それがきっかけとなって、友達となった「ばっちゃん」をモデルに第一作が出来たのです。

「おばあちゃんが大きな口をあけて『あつはつは』と笑うんですよ。笑いながら帰っていくんです。それ以来、口開けて笑っていてもいいんじゃないか、とね。最初は楽しくて夢中で...」

子育てに追われ、何度かのプランクを経て2年前から創作活動を再開しました。

「ふるさと祭りとか盆踊り、お田植え祭を見ていると『こんなのいいなあ』と思うんです」。

今年の道展でも「鍬を持つ男(ひと)」(高さ約35<sup>センチ</sup>)が入賞しました。工芸部門で2年連続。数年ぶりの個展開催に向けて弾みになりそうです。

「鮮やかな色を使えないんです。それがモデルさんと合うからでしょうかね。『顔が変わったね』と言われるんです。自分の顔に似てくるのでしょうか」。

道の駅ではショーケースの中に展示中  
キトウシ物産センターに展示中の作品



「立ち話」(H9~10年ごろの作品、キトウシ物産センター)



日なたぼっこをしているおばあちゃんの最新作色付け

みやたけ ますみ  
宮竹 眞澄さん 人形作家/2西区 ☎82-3759

【プロフィール】大分県宇佐市出身。58歳。県立四日市高校卒。中村料理学院専門学校(福岡市、現中村調理製菓専門学校)調理師養成科卒。沖電気工業㈱入社。調理師として3年間社員寮の給食を担当。その後結婚退社し2児の出生・育児後、1980(昭和55)年、神奈川県藤沢市在住時に独学で石粉粘土の人形制作を開始。翌年、同市内の江ノ電デパートで早くも第1回展示即売会。1991(平成3)年、一家で東川町に移住。その年から11年間、道人形作家協会主催の北海道人形道展に出展して7回入選。3年間の創作活動中断を経て再開後の平成13年、第17回展で北方圏センター会長賞。昨年(第18回)展で道教育長賞。同年、北海道美術協会主催の道展第81回展工芸部門で入選など入選多数。